広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	森鴎外と夏目漱石の留学経験の比較
Author(s)	エドワード マクレイト,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1995 : 153 - 164
Issue Date	1996-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039374
Right	
Relation	

森鴎外と夏目漱石の留学経験の比較

エドワード・マクレイト

森鴎外と夏目漱石の留学経験を比較すると、二つのつながりのない正反対の性質を簡単に見出すことができる。たとえば一方では、鴎外は若くて、楽観的で、社交的で、ドイツの娯楽に誘惑されたけれども、他方では、漱石は割に年をとっていて、自分の部屋に閉じこもって、英文学にしか興味を示さず、ほとんど例外なく、他のイギリスの文化を辛辣に否定していた。この説明はもちろん大ざっぱで、簡潔すぎるので、後にもっと深く描こうと思っているけれども、鴎外と漱石の留学の経験の相違が大きく目立つことを示すために、当座はかなり役に立つ。

この相違が大きいほど、共通点もあることが見落とされがちである。共通点は、性格の点では少ないけれども、経験の方にある。又、ヨーロッパに在留した時代の日記、手紙、思い出などをざっと目を通しても、鴎外の方は漱石よりさまざまなようにヨーロッパの社会に活躍していたと言ってもいい。しかし、この角度だけから留学の経験を考えることは、鴎外と漱石を派遣した明治国家と同じように、視野が狭い。この派遣の目的を調べると、共通点が現れる。

明治維新以来日本の国家は幸福と安全を守るために、日本が経済的にも軍事的にも西洋の水準に達しなければならないと思っていたから、西洋の比較的に発展していた技術を学ぶように学生を西洋に派遣した。しかし、どのぐらい西洋が物質的に優れたと認めても、当時の「和魂洋才」というスローガンのように、日本の特別な精神に誇りがあったから、それを捨てない方がいいと思っていた。

この政策には問題がある。第一に、西洋の物質的な文化は日本に導入した方がいいかどうかは疑問がある。たとえば鴎外は西洋の医学が日本より優れたから導入した方がいいと信じていたが、西洋の建築は、西洋の都市で見るとすばらしいのに、日本の建築と調和しないので、そういう物を導入してならないと考えていた。第二に、日本が西洋の技術を物質的にしか使わなくても、使うことは日本人の精神と関係がないから影響をぜんぜん与えないと政策は前提して挙げた。しかし実は、「洋才」が「和魂」を変化させることは当然だ。「洋才」は「洋魂」の特徴のために発展しながら、同時に「洋魂」は「洋才」に影響を与えられて発展したように、日本も開化しながら、精神的な変化に歯止めをかけようとすれば、緊張を起こすことに決まっている。

国家によって外国へ派遣された学生は、留学経験のために、国家の制度を疑問視し始めるという結果が出て来た。鴎外も漱石も、西洋の技術を学ぶためにヨーロッパへ派遣されたことに従って、鴎外は医学と衛生学に忙しかったし、漱石は英文学に専心していた。し

(2)

かし留学は専攻の研究だけではなかった。むしろ、距離的にも、文化的にも、二人とも日本から大きく離れていたので、ヨーロッパの異文化は絶えず頭の中で日本との比較を起こすように刺激していた。それで、自分が日本人であることを痛切に感じながら、同時に日本を外の視座から主観的に見始めた。つまり、ヨーロッパへ派遣された目的によっては、日本の視座から西洋の技術を研究すべきだったけれども、実はそれだけではなく、ヨーロッパの立場から日本の文化を考えていた。そして母国からも、ヨーロッパからも、精神的な隔たりがあって、精神の一部分は国籍のない空間にあった。

げに東(ヒンガシ)に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず

と鴎外を代表する太田は「舞姫」で主張する。太田の伝えようとしている意味は、ドイツで医学をたくさん習ってきたことではなくて、あるいは向こうにいる間ドイツのビールが好きになったことでもなくて、むしろ精神的に変わってきたという意味だ。

鴎外と漱石は二人とも明治時代の日本を主観的に考えていたが、結論は大分違った。彼らの違う意見の解釈のために、彼らの性格及び留学の環境によって違う経験と、ヨーロッパに対しての印象を調べなければならない。ある程度、二人の留学時代の環境は自分の力で支配ができることではなかった。たとえばイギリス人が不親切で、ロンドンが煙霧に覆われたのは漱石の避けられることではなかった。しかし、漱石はイギリス人ともっと積極的に友達となろうと努力しなかったから惨めな一匹狼のような生活を送っていたことは、イギリスの環境のためではなくて、むしろ漱石自身の作った環境だったと言っていいだろう。それで、漱石のイギリスにめぐっての意見はイギリスに着いた前の偏見から本当に解放されていたとは言えない。逆に、鴎外の方は社交的にドイツ人と一緒に遊んでいて、漱石のような偏見を持たずに、ドイツの文化に入ろうとしたからドイツの社会のいい点がより深く分かってきたと言っていいだろう。ドイツに行く前にも、ドイツの文化に関心を持つ態度があったから、ドイツに暮らしていた時、その関心がある点を探しに行った。

では、日本から西洋へ出発する前の二人の態度を説明しよう。ところで、漱石の場合、日本から出発する前の態度はイギリスに着いた後の態度と違う。なぜかと言うと、西洋の食べ物の習慣の嫌いや、日本から離れて、外国人ばかりの世界に入っていたことに基づいた孤独感などは、船に乗ったすぐ後漱石に現れたのだ。

鴎外は医学と衛生学の研究のためにドイツへ派遣された時まだ二十二才だったけれども、もう長い間とても行きたくてうずずしていた。留学は彼の軍医としてのキャリアの次の一歩となった。多くのエリートの若者の間から選ばれたから、自尊心は高かった。鴎外の家族は武士階級だったからそれにも誇りを持っていた。しかし、出身の津和野も東京から遠くて、田舎で、別の世界のようだったので、学問のため上京すれば故郷と違う言葉と作法を習わなければならなかった。この経験は割に若い鴎外に、ドイツに在留していた時に役

に立った、多才及び独立感を起こした。このように、ヨーロッパへ渡る前、鴎外の自信は高かった。なお、彼の出発前医学の研究はドイツの優れた知識を表したから、ドイツはすばらしい国であると期待していた。

漱石の方は、イギリスへ渡った1900年（明治33年）は、鴎外の出発の十六年後であって、もう三十三才だったから、比較的に年をとっていて、鴎外のような若者の楽観的な活力は持っていなかったし、鴎外の時代より、その時の日本人には開化の結果が見えたので、開化が有利であるかどうかということなどをよく考える余裕はあった。

漱石は江戸っ子で、先生として松山と熊本に住む経験は冒険や性格の成長の機会であるように思ったのではなく、むしろ追放であるように思っていた。従って、イギリスも利点をもっていることは疑問していた。イギリスで勉強したいと主張したことがあったのに、イギリスでの留学は強制されたことであると後で漱石は不満を言った。イギリスへ出発した前に行きたかったであろうとなかろうと、着いた後イギリスがすぐいやになった。その前でさえ漱石の自信の不足はイギリスへの航海で現れた。ミセス・ノット（Mrs Knott）という熊本で知り合ったイギリス人と船で偶然会って、漱石はミセス・ノットの話し方について、後でこう書いた、

While word after word flows from her lips in melodious smooth succession I listen to her half in admiration, half in bewilderment, away she goes like a boat sailing over the languid stillness of the dark glassy surface of the calmed lake.

（彼女の唇から音楽的に、滑らかに、次々と言葉が流れ出て来るのを、私はなかば感嘆し、なかば当惑して聴いている。彼女は行く、静かな湖の暗い鏡のような水面の、ものうげな静寂をよこぎる帆船のように。）

次に、ミセス・ノットの話がほとんど分からなかったから、馬鹿にさせただろうと書いた。しかし、この英語は正しいことだけではなくて、その上きれいで、詩的だった。自分の英語の能力の不足をきれいな英語で表現することは矛盾している。しかも、漱石は英語の先生だったのに、自信がなかった。比較すれば、鴎外の方は十一才若かったけれども、自分のドイツ語の力に満足していた。漱石の自信がなかったのは多分英語の能力の問題ではなくて、むしろ外国人と会う時恥ずかしかったからなのかもしれない。

漱石は英語の能力の不足の意識と外国人の前での恥ずかしさがあるほど、イギリスの社会に入りにくくなった。世界の向こうまで広がった帝国のせいか、イギリス人は外国人に対して高ぶっていて、難しいウィットやユーモアが使えないほど英語が上手じゃない人を冷たい目で見る傾向もある。漱石はイギリスで違和感を痛切に感じた。自分の肌は黄色だし、背が低いから、店の窓に映っていた、イギリス人に囲まれた自分の姿をちらっと見た

(4)

時、笑い出さずにはおれなかったほど自分は醜いと思っていた。

漱石の孤独感はイギリスへの航海で初めて現れた。次の俳句を作った、

秋の風一人を吹く海の上

しかし、日本から離れて、海の真ん中で漱石は孤独を感じた上、自分の精神はこの旅のうちに解放されたのも意識していた。

The sea is lazily calm and I am dull to the core, lying on my long chair on deck. The leaden sky overhead seems as devoid of life as the dark expanse of waters around, blending their dullness together beyond the distant horizon as if in sympathetic stolidity. While I gaze at them, I gradually lose myself in the lifeless tranquillity which surrounds me and seem to grow out of myself on the wings of contemplation to be conveyed to a realm of *vision* which is neither aesthereal[sic] nor earthly, with no houses, trees, birds and human beings.

（海はどんよりと静まり、私は身体の芯まで倦怠にひたって、デッキの長椅子に横たわっている。頭上にひろがる鉛色の空は、周囲の黒ずんだ水のひろがり同様に生の影をとどめず、はるかな水平線のかなたに、あたかも鈍い沈黙を交感させるように彼らの倦怠をとけ合わせている。海と空とをみつめているうちに、私はやがて周囲の生を奪われた静寂のなかにわれを忘れる。私は瞑想のつばさに乗って自分をぬけ出し、天でもなければ地でもない、家も、植木も、鳥も、人間もいない幻想の領域へとはこばれる。）

と後書いた短編で航海の気持ちを表現した。日本にも、まだ着いていないイギリスにも属していないけれども、無人の、からな世界、いわゆる「幻想の領域」、つまり自分の内面的な精神という世界にしか属していないという気持ちの原点がこの文章で現れている。孤独があるほど、漱石は外の現実の世界より、自分の頭の中だけにある精神の方にますます生きていた。一人で考える時間が多かったから現実的な日常生活の事より、日本のような東洋の国の西洋化から起きる、簡単に解けない主観的な問題を考え始めた。つまり、漱石は大きな問題を始終心配していた。漱石と同じように仕事に忙しくなくて暇があるほど考えすぎる知識人は漱石の小説で数多く現れた。この主人公達は漱石の性格が反映していると言ってもいい。鴎外の方も感受性が強くて頭もいいから漱石と変わらない主観的な考え方があったけれども、とても社交的で、仕事や遊びや日常生活などに忙しかったので、漱石ほど考える時間が少なかった。時間があって、主観的な問題の内面化に悩まされても、それを考える以外の生活が楽しかったから、楽観的な態度が続いた。

漱石の場合、勉強の指導者の欠如も内面化の原因の一つとなった。最初に漱石はケーン

ブリッジ大学で勉強しようと思っていたけれども、学費は高すぎた。しかも英文学は古典語・古典文学と比べて通俗的であると大学は思っていて、まだ英文学部は設立されていなかったし、学生は皆ティ・パーティーやボートで遊んでばかりいると真面目である漱石は思ったからケーンブリッジへ行きたくなくなった。代わりにエジンバーを考えたこともあったが、ロンドンの方は大きいから本屋が多いはずだと思って、結局ロンドンにした。ロンドン大学で講義をとってみたけれども、中世英文ばかりだったので、これをやめて、Craig（クレイグ）というアイルランド人のシェイクスピヤー学者の生徒になった。週に一回だけ二人で授業があって、授業の構成も緩くて、クレイグは教えようとせずに自分の好きな、個人的な感想によって喋りまくっていた。漱石よりも漱石の払った金の方に興味をもっていた。それで、イギリス人に習うために、明治国家によってわざわざ選ばれて派遣された漱石は指導された勉強をほとんどしたことがなかった。一年後漱石はこの授業もやめて、下宿の部屋での勉強しかしなくなった。

漱石は郊外にある下宿というアカデミックでないところで勉強したうえ、外の世界と会う機会がなかったから、文学についても西洋での生活についても、実は漱石が考えていた全部のことについての話し相手もなかった。指導者や話し相手がないから寂しかったけれども、いい結果もあった。たとえば、他人に頼らずに一人で文学の事を調べて判断しなくてはならなかった。しかも、日本語で書いてある英文学についての本がほとんどなかったから自分の意見を発展させるために文学の根本まで調べるほかはなかった。「文学論」と十八世紀英文学を批評する「英文学論」はこの研究の成果だった。「文学論」にはF+fという二つの因数だけで文学の全部を説明しようとしたが、こんな科学的な方法は多様性のある文学をそう簡単に分析できないから漱石は失敗したと言っていいけれども、こういう作品を書こうとした勇気をもっていたことは漱石が自分の英文学の知識に自信が高かったのを示す。実は、イギリス人よりもよく知っていると思っていた。なお、漱石は日本人であるためにイギリス人が彼の批評を無視するはずだと思っていたので、フラストレーションがたまって、イギリス人に対しての憎しみが強くなった。しかし同時に、漱石の一人でできた勉強はイギリス人の性格の一つの特徴を尊敬させた。イギリス人は個人を大事にしたり個人の力を信頼したりするというわけだ。日本に帰った後漱石は「私の個人主義」という題目をつけた講義でこれを深く説明した。欲張りな資本主義者の動機である利己主義を薦めていたのではなくて、むしろ個人は一人で善と悪を区別して意見を構成しなくてはならないと主張した。これと同様に漱石は英文学について自分の個人的な意見を発展させた。

しかし漱石の個人主義は現代の日本の社会と合わなかった。なぜならば日本では自分が一人で判断するより上司の命令に文句言わずに服従しなければならないという道徳はもっともだったから。天皇が神様だから皆天皇に服従すべきだという制度は神様を信じられない漱石の不満の一つであった。日本の権力の頂点にある天皇の命令を疑問していたので、天皇よりも身分が低い政治家などに服従することも漱石にとってはつらかった。現実の例

を挙げると、漱石は日本が物質的に西洋化しなくてはならないという明治国家の独断を納得できなかった。鴎外もある程度漱石と同様に思っていたけれども、彼の決断は漱石と違う経過の結果であった。ところで鴎外は天皇が神様であることを信じられなかったけれども、日本の制度が大きく変わるはずのないことにあきらめていて仕方がないと思っていた。それで天皇が神様であると信じている「かのように」行動していたと書いた。これは現実的でありながら知的な嘘だから他人に非難された。

鴎外は、漱石と比べると、ドイツ人により暖かく歓迎されて、士官であるために尊敬された。1884年のドイツは1900年のイギリスと随分違っていたのはこの現象の原因の一つだ。1871年のフランス・プロシア戦争の後ドイツはビスマルクに統一されたばかりので新しい国で、士官の鴎外を尊敬する軍事的な雰囲気があった。その時のドイツは産業革命が最近のことであって、一般的と言えばドイツには科学の進歩について積極的に前を向かう態度があったから、これにも鴎外は関心していた。

鴎外は漱石よりドイツの社会に深く浸っていたし、もっと広い経験ができた。ライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヒェン、ベルリンの四つの都市に順番に研究していた。自由も生かして使った。夜は劇場やダンスホールや飲み屋や贅沢なパーティーなどによく行っていたし、後でもっと深く説明するように、恋愛関係もあった。漱石は劇場と美術館に行ったほかに、毎日一人で本を読むことしかしなかったけれども、鴎外の方は明るくて若い学生や有名な先生と一緒に医学の研究を先駆していた。鴎外は何よりも現実的な性格だったからこの経験は彼の西洋に関する印象を大きく影響しただろう。結果を発見する近代的な研究技術、いわゆる「実験と観察」はその結果よりも関心させた。

Forschung（研究）ノFrucht（結果）ヲ教エルノ期ハ去レリForschungヲ教エベシ。

と鴎外はベルリン時代のノートで書いた。それで鴎外は日本の方法が変わらなければならない、つまり洋才（「結果」）の導入よりも洋魂（「研究」の技術）の方がましと言っている。鴎外は自分の研究を見てから西洋の技術を無分別に導入してはならないと分かった。ライプツィヒで日本兵食を調べて、それが栄養に満ちているし日本の既存の食用の栽培に適合している。それで日本の軍隊が西洋のように強くなるために兵食までも西洋の方法を使おうと思っていたのを、鴎外は納得できなかった。だから、鴎外はドイツの技術に感心していたけれども、留学中日本の文化の多くのことにも信頼が高くなってきた。従って、日本への旅行から帰ったEdmund Naumann（エドムンド・ナウマン）というドイツ人の講義に出た時、ナウマンは「日本の開明の度」は著しく低いとか、日本人は女性を不親切に取り扱うとか主張したので、鴎外は腹が立って、日本の代表として新聞記事でナウマンと日本の真実を論じた。ナウマンがアルゲマイネ・ツァイトゥング紙で書いた"Land und Leute der japanischen Inselkette"（「日本聯の地と民と」）に対して鴎外は"Die

Wahrheit über Japan"（「日本に関する真相」）という記事で答えた。ナウマンの日本のイメージに馬鹿な間違いが多い。たとえば日本人は多妻主義者であるとか書いた。それで鴎外は日本を弁護することは当然だと言ってもいい。しかし鴎外は母国心及び日本に高く信頼していることも示した。新国家日本は「まだ世慣れない子供」にたとえて、「子供には発展する能力がある」し「その子供が有能な立派な大人に成長する」と鴎外は次の記事で断言した。日本にとっては成功というのは西洋と同じ方向に上手に発展することだと鴎外は基本的にまだ思っていたことが現れた。

逆に漱石の方は第七夜でこう書いた、

「この船は西へ行くんですか」
船の男は怪訝な顔をして、しばらく自分を見ていたが、やがて、
「なぜ」と問い返した。
「落ちてゆく日を追っ懸けるようだから」
船の男はからからと笑った。そうして向こうの方へ行ってしまった。
「西へ行く日の、果ては東か。それは本真（ホンマ）か。東出る日の、お里は西か。それも本真か。

この「船」が象徴するものを日本にすれば、この文章は日本がどこへ行っているか分からないという心配の表現となる。日本は西へ行こうとしているみたいけれども、東に始まったから西へ行くはずだとは言えない。たとえば日本は原始的な未発展の社会だから発展するまで西洋化するはずだというのも非論理的な考え方である。むしろ、尻馬に乗って開化しようと深く考えずに激励している日本人の多いのに反対して、漱石は日本の文化が西洋と違うのだけれども劣っていると言ってはいけないと思っていた。日本が西洋化するより平行にまたは西洋と違う方向に進んでもいいと思っていた。西洋の科学や技術に興味がなかった。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学をしってるかと尋ねた。自分は詰まらないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。

と第七夜で書いた。

1904-5年の日露戦争の成功などのために、鴎外は日本の才能にますます信頼していた。日本は特徴があるから近いうちに西洋の水準まで上がって、西洋よりも強くなる可能性もあると信じていた。だから鴎外は歴史を調べて、作品で日本の精神の特徴をテーマにし始めた。「阿部一族」の登場人物は殿様が死んでしまうと、皆自殺させてもらうように折り入って頼んだのは、日本の忠実と自殺との伝統が鴎外の主題となった例の一つだ。鴎外は

日本の過去、特に儒教に関すること、を調べたため、ますます保守的になった。

しかし日本の歴史的な探検をする前鴎外は一時的にロマンチック風な小説を書いた。ドイツで本を読んだり、友達と一緒に哲学や宗教などを話し合ったり、読書会に行ったりしていて、ドイツの文芸をよく知っていたからその時はやっていたロマンチシズムに影響をうけたのは当然だ。

「舞姫」で鴎外を代表する太田とエリスというドイツの女性との間柄は現実と比べるとどの程度架空だったか事実だったかよく分かっていない。でも、鴎外の帰国後同じ名前のある女は鴎外と一緒にいるために来日して、鴎外と彼の家族に恥をかかせると考えれられてドイツへ帰らせられたという事件があったことは知られている。だから鴎外の恋愛関係はロマンチシズムの興味と同様に一時的だった。ドイツで過ごした四年間は楽しかったしドイツに関心したことが多くて日本に帰りたくなかったけれども、結局日本人だったから日本での責任を避けてはいけないと分かったので、仕方がなくあきらめた。ドイツで味わったロマンチズムも、日本の社会でほとんどない自由が必要だから、帰国後、短いロマンチシズムの時期の後鴎外はあきらめて、これも捨てた。ドイツでの在留は鴎外の日本にある現実の不自由な存在からの休みしかならなかった。

ああ、独逸に来し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。

と「舞姫」で太田がぶつぶつ言った。エリスとの関係は失敗に決まっていると現実的な性格である鴎外はいつも分かっていたのに、別れた時はつらかった。しかしエリスの描写は純粋で、乙女らしく、恋人でも殿様らしい人でもある太田に敬語で話したほど忠実である女だから、髪の毛が黄色で目が青い以外、エリスは鴎外の理想的な日本人の女にほかならない。鴎外はエリスの性格の個人的な特徴を描写しないので、エリスとのプラトニック愛、つまり西洋のロマンチックな愛を意味することはあまり感じていなかった。終わりに太田が愛よりキャリアを大事にしてエリスと別れて、日本へ帰ったのもロマンチックであると言ってはいけない。「うたかたの記」は本当のロマンチックな話だけれども、美人や王様などの生きているファンタジーの世界だけだから鴎外の実生活につながりがない。日本に帰ってから、ドイツでの自由の四年間の思い出がだんだん遠くなったほど、ロマンチックな感動も薄くなってしまった。後で初期のロマンチックな作品を軽蔑するようになった。

しかし漱石の英文学の研究からきた影響、たとえばスイフトのパロディの方法はいつまでも意識的にか無意識的にか残った。イギリスで起こった精神分裂も日本に帰っても長い間残っていた。友達がなかったからもちろんロマンチックな関係もなかった。刺激の少ないロンドンの郊外に住んでいて、イギリスの田舎の牧歌な風景も知らず、ロンドンの中央

の賑やかな生活にも参加せず、ロマンチシズムは漱石にありえない態度だった。

漱石はイギリスへの船で精神的に日本から解放された国と関係のない空間にいると感じた。イギリスに行っても社会に入らなかったので、この空間を出なかった。一日中一人になって本を読んだり問題を心配したりするほか漱石は何の用事もなかったから精神分裂になったのは分かりやすい。帰国前漱石はスコットランドのピトロクリへ旅行して、そこの昔からずっと変わっていない谷の風景について「昔」という短編を書いた。煙霧に覆われたロンドンと違って、空気もきれいだった。そこの庭にある薔薇を次のように描いた、

一木の薔薇が這いかかって、冷たい壁と、暖かい日の間に挟まった花をいくつか着けた。大きな弁は卵色に豊かな波を打って、萼から翻えるように口を開けたまま、ひそりと所々に静まり返っている。香(ニオイ)は薄い日光に吸われて、二間の空気の裡(ウチ)に消えて行く。自分はその二間の中に立って、上を見た。薔薇は高く這い上って行く。

それでここは、薔薇が高く這い上って行くように、着々と成長するのにふさわしい静かさがあって、誰でもいい所であると同意するはずだ。しかし漱石は精神分裂のためにここにも彼の心の落ちつきを妨げた不満ができた、つまり昔ここでは戦争があったということに悩んでいた。終わりにこう書いた、

足の下に美しい薔薇の花弁(ハナビラ)が二、三片散っていた。

戦争の跡がもう目で見えなかったのに、風景が一気に汚れてしまったように漱石はがっかりした。ピトロクリでようやくいい所を見つけたから落ちつこうと思っていたが、緻密な観察をすれば薔薇の弁が散ってあるように、ここでも精神が散っていた。日本に帰ってもこの神経の弱い精神状態は残った。漱石がまだ友達と遊ぶ気もせずに、真面目に研究してばかりいるのは「道草」という私小説で現れた、

家へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心は殆ど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へも滅多に足踏み込めない位忙しがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体(テイ)よくそれを断ったが、彼は心のうちで、他人(ヒト)にはどうしてそんな暇があるのだろうと驚いた。

鴎外も仕事に忙しすぎていると自覚した。ドイツでの留学は、義理で仕事に身をささげなければならないし西洋と比べて家族に対して責任がより多い、個人的な自由や余裕が少

ない日本の社会と違う西洋の制度を主観的に見たり自分の人生や日本の社会などを考えたりする機会となった。軍医総監位まで上った鴎外はキャリアの成功があったのに、いったい何の宛に一生懸命働いているか迷ったことがある。

生まれてから今日まで、自分は何をしているか

と「妄想」で書いた。人生の唯一の目的は仕事だけであるように生活を送ることが耐え難くなった。鴎外は儒教の影響で勤勉が日本人の誉めるべきな特徴であると思っていたにしても、彼自身の仕事は国家に奉仕するためにしていたのではなくて、実は自分または家族の欲望のためだったと知っていた。自分の人生は他人や自分の支配出来ないプレッシャーによって決まっていると鴎外はあきらめて思っていた。ドイツに行って、そのより自由な人生観が魅力的だったが自由を絞めた日本の制度から逃げ道がなかった。鴎外にとっては、西洋と東洋の問題というのは自分一人の個人的なことしかならなかった。漱石の方は作家だったから厳しい社会に距離があって、自分の人生が不自由であるとあまり感じなかったから、イギリスでの留学のために悩み始めたのは漱石自身の日常生活に西洋が東洋と衝突しているのではなくて、むしろ外の社会の多くの大きな問題の内面化の方に原因が潜んでいる。なお、作家だったから時間的に悩む余裕が多かったけれども、鴎外の方はキャリアに忙しかったから精神分裂にならないほど悩んでいなかった。

ドイツで自由に遊んでいたのに、留学のために鴎外がリベラルな考え方になったとは言えない。芸者によく通っていた自然主義者の作家と違って、厳しく性欲を抑えた。ドイツから帰ってから結婚したが一年半の後離婚して、十二年間独身だった。その間ずっと、孤独感を防ぐための再婚は絶対だめと思っていた。「鶏」の語り手は家政婦を選んだら、誘惑されないために、せっかく年をとった女や醜い女しか雇わない。鴎外が比較的にリベラルであるドイツで留学して、結局もっと保守的になってしまったのは矛盾したことみたい。しかしドイツで日本がとても西洋と変わった国であるという意識が強かったのに、日本の特徴に信頼していたから、中国や韓国と比べたら日本の発展がとても早く進んでいた理由を調べようとした。それで儒教や武士道などからきた日本の伝統的な道徳と価値観とはこの特徴に大きく影響を与えたと鴎外は結論した。鴎外自身は武士階級の一人だったから調査のため、昔と自分とのつながりを感じた。鴎外にとってつらかったのは留学が日本及び自分の人生に関して主観的な考え方を与えてしまったから、だんだん変わっている近代的な世界の中でも昔の価値観を信じているように行動するのが馬鹿であることや、日本の社会の組織の不自由などを、他人より鋭く意識していた。ある程度日本は西洋の方が優越していると鴎外は思った。たとえばドイツで習った研究の方法を導入した方がいいと主張した。しかも日本は短い変化の時期の後西洋とあまり相違のない国になるはずだと信じていた。

漱石の方は西洋が東洋と根本的に違うと信じていた。しかし、鴎外と違って、価値観と言えば自分は伝統的な日本につながりがあるとあまり思わなかった。一匹狼の作家だったから日本の伝統的な階級組織と合わなかった。同時にイギリスでいい経験が出来なかったので日本の西洋化の努力を納得しなかった。鴎外と同じように、留学経験はその時代の日本人に珍しい主観的な考え方を与えた。これを以て、日本の開化を批評したり嘲笑したりしたが、何よりも心配していた。それで、留学経験は知恵を与えたが自分の幸福のために役に立たなかった。「現代日本の開化」という講義で述べたように、

「知らない中は知りたいけれども、知ってからは却ってア、知らない方が宜かったと思ふ事が時々あります。」

しかし漱石はこう言ったのに、留学をしたことは後悔しなかっただろう。留学経験に基づいた悩みは小説の内容となったことを考慮しても、内容は小説を書く動機の一つしかならない。内容の表現の方法も大事だ。これは留学で勉強した英文学に大きく影響を与えられたから、新しい境地を開いた漱石の小説の全体を考えると、留学したのはよかった、と考える。

参考文献

江藤淳。漱石における東と西、日本比較文学会編、主婦の友、東京、1977

江藤淳。漱石とその時代第二部、新潮選書、東京、1970

Hearder, H. A General History of Europe-Europe in the Nineteenth Century 1830-1880, Longman, London, 1966

生松敬三。森鴎外、東京文学出版会、東京、1976

Keene, Donald. Dawn To The West: Japanese Literature of the Modern Era; Vol.1.Fiction, Holt, Rinehart and Winston, New York, 1984

Miyoshi, Masao. Accomplices of Silence, University of California Press, Berkeley, 1974

森鴎外。全集、岩波書店、東京、1971-75

夏目漱石。全集、岩波書店、東京、1974-76

日本文学研究資料刊行会編。日本文学研究資料叢書：森鴎外第一巻き、有精堂、東京, 1970

Roberts, J.M. A General History of Europe-Europe 1880-1945, Longman, London, 1981

高橋義孝。森鴎外、新潮社、東京、1985

矢本貞幹。夏目漱石：その英文学的側面、研究社、東京、1971